追悼　鈴木儀一教授

本年夏休みに入って間もなく、七月二十五日深夜、鈴木儀一先生は急逝された。通夜、葬儀は御自宅において、佛式によりとりおこなわれた。
享年六十二歳。法名　教徳院法学日儀居士。

弔辞

岡崎　正

つひにゆく道とはかねて聞きしかど
昨年今日とは思はざりしを

鈴木儀一先生、先生は『伊勢物語』を愛され、教室においても、長年『伊勢物語』を講じておられました。右の歌は、「昔男わづらひて心地死ぬべく」思われた時の作といわれますが、今日、ここに最後のお送りをする私どもの偽らない嘆きをも表わしているように思われてなりません。人間、いずれは直面する、ついに行く道程とは知りつつも、先生のご長逝を、昨日今日と誰が思ったでしょう。先生は、とうとうその帰らぬ旅に就かれました。「つひにゆく道とはかねて聞きしかど昨日今日とは思はざりしを」先生、みたまやすらかにお眠りください。

先生が、六二歳でお亡くなりになった今日まで、最も情熱を傾けられたのは、駒沢短期大学での二〇年にわたる教育活動であったと信じます。教室会議や教授会における熱心な教育理念の展開、時には、はらはらするよう

な大声叱咤に、会議場が一瞬水を打ったような静寂につつまれたこともありました。しかし、新入生のオリエンテーションでの噛んでふくめるような御指導、講義の終ったあと、廊下でにこにこしながら女子学生と語り合う慈み深いお姿に接した者は、みなほのぼのとした微笑を禁じ得ないものでした。先生は、こよなく学生を愛されました。この愛情は、その厳しい教育観によって生み出されたものに違いありません。教育者としての高い識見と実践、この偉大な遺産を私どもは無駄にしてはなりません。

先生は、学究として、文献の精査につとめ、有職故実に通じ、主として中古・中世の和歌・物語を専攻され、時に学生をつれて金沢文庫の探訪を試みられたこともありました。また、古事記学会の発展に尽力されたことも、大きなお仕事の一つでした。文学の芸術性に関しても一家言を持たれ、その業半ばにして逝かれたことは、実に残念なことです。

思えば、先生は生粋の駒沢人であられました。世田谷中学を卒え、駒沢大学専門部国漢科・文学部東洋学科・大学院人文科学研究科に学ばれ、東京都立北園高等学校に教鞭を執られましたが、昭和四五年から駒沢に回帰、今日まで、短期大学にその生を捧げられました。この間、国文科主任・広報部委員長など重要な職を歴任され、大学の進むべき道を常に照らし続けられました。今、先生を失った駒沢は、いっそうの奮起を誓わなければなりません。

先生は駒沢を愛し、学生をいつくしみ、ご家庭にあっては、奥様とお子様方とまことに幸せな生活を楽しまれました。しかし、病は冷酷でした。今、私どもは、大きな穴のあいた感にひたっています。昨夕のお通夜、先生は雷神となり給い、風を呼び、雨を降らせ、そして最後のお別れに集った私どもを、いつまでも帰らせまいとされました。

鈴木儀一先生、いつまでも暖く、そして厳しく見守ってください。

（この弔辞は、平成二年七月二七日、先生のご自宅で執り行なわれた告別式で、ご霊前に捧げられた）